

お 年 よ り 作 文 集

第 十 九 集

昔のこと

桜井 勇
(八二歳) 一頁

疎開と終戦後

梅田 武男
(八四歳) 九頁

昭和に生まれて

桜井 武子
(八五歳) 三九頁

米寿を迎えて

山田 ゆき子
(八八歳) 五九頁

思ひ出

前田 市之助
(八九歳) 七九頁

昔のこと

昭和五年十月二十八日（八十二歳）

桜井 勇
(長兵エ)

私の実家は、友丸です。両親が神津では現金収入が無いので大島へ出たため長男から私まで大島で生まれました。七人兄妹の三男でしたが、長男は十五歳で亡くなっています。

差木地村の字クダツチに家があり、差木地小学校へ通いました。

大島での生活は戦時中の暮らしで、主食は芋、麦でした。

ある時、海岸に魚雷艇を収納する穴を掘り、そこへ電気を送る発電所へ点検に行つた時、市場の手前で空襲があり、当時、「敵の飛行機は急降下は出来ない」という話があり、高い山があつたので、みんな油

断していたら出来ないどころか急降下してきて空襲を受け、貨物船・漁船2～3艘がやられて漁協に勤めて居る人が爆撃で片足を無くしました。私も、発電所の点検に行かなかつたら、もう少し早く市場に着いていたらやられていたかもしれません。

終戦の年、島の人は運搬船などで疎開していましたが私の家はしませんでした。百戸位の集落でしたが、二十から三十戸が残つたと思います。その年に十五歳、高等科2年で航空兵に差木地村からは私ともう一人が志願して検査に千代田第三小学校に行くと五十～六十人くらいが居ました。検査を受けましたが、通知が来なくてそのまま終戦になりました。

前の年に志願した一級上の人達は小笠原、硫黄島が空爆を受けており、皆帰りの燃料を積まないで出撃して行つたそうです。私も一年早く生まれていたら今は居ないかも知れません。当時の教育は「国を守る」「家族の為」という気持ちで私も招集されていたら出撃していました。

と思います。

終戦になつてからは、素潜りで天草、貝など取り、ドラム缶で塩を炊いて生活の足しにしました。

その後兄弟三人で船を持ち、波浮港で漁をしました。

二十一歳で家族で神津に帰つて来て、二十五歳で長兵工に婿に来ました。

親が漁協の理事をやつていたのでマンガー（平草）が値がよくなりそうだからと、新しく船を求めて天草、伊勢エビ、平草をやりました。

平草は大きな熊手のような道具を海底に落とし、それに草をひっかけて取る漁です。自分たちで浜に干して仕上げてから梱包して出荷するので大島から従姉妹を呼んでやりました。
現金収入になるということで、今の巾着漁より操業する人は倍以上いたと思います。平草はとこりてんの他、火薬の材料にも使われたそうです。

四十歳の頃、お寺の木出しでマンガー仲間と、つづきの走る間河原から丸太を切り出して、勘三の杉山を担いでいたら前の日に雨が降り山の斜面がぬかるんでいて足を滑らせて、その時腰を悪くしました。又、五十歳くらいの時、建設会社で仕事をしていくつづきのお堂の杉の木を担いで大きな切り株を避けねば良かつたのに、担ぎながら越えたため、腰に大きな負担がかかつたらしく、二回目腰を悪くしてこの時は長男のお嫁さんが看護婦をしていて、東京医科大学病院に2ヶ月入



院しました。

ヘルニアということで、医長さんに手術を勧められて、同意書にも署名しましたがいろいろ考えて手術はしませんでした。

腰が悪くなつたので救済工事・失対工事にいき、小学校上の道路を作る仕事をしたりして工事が無くなるまで最後まで働かせてもらいました。

昭和四十七年、五十二歳の頃今の家を建てて民宿を始めて平成十年位までやりましたが、各部屋にクーラーを付けなければいけないと観光協会から言われて、当時1台二十万～三十万したので十台なんてとても付けれなくて廃業しました。

平成十二年の地震の時に妻が、台所を歩いていたら余震が来てテーブルかイスの脚につまづいて冷凍庫に頭をぶつけてしまいました。ぶ

つかつた時は、すごい音をしてしばらく気を失つていきました。

動かさないほうが良いと思い様子を見ていたら気がつきました。その時診療所に連れて行けば良かつたと思います。

次の日も診療所へは行かず、芋の植え時なので畑へ行くと言い、私が作業をして妻は休んでいましたが、ちょっと動いて歎をまたごうとしてそのまま倒れ込んでしまい、慌てて家に帰ってきました。家に着いたら頭が痛いと言いだしたので東京の子供に電話して翌日出島しました。

この時も診療所に行けば良かつたと思います。

なかなか、病院が決まりず石神井の病院に入院し、一度転院して2年位入院していました。

その後、神津に帰つて来ることが出来、ホームに入所して平成十七年に亡くなりました。

八十歳まで一人で腰をだましだまし天草、海老網をやつてきましたが、ボートを一人で揚げるのも大変で波、風をみて工夫して揚げていると必ず手伝ってくれる若い人がいて助かりました。

漁をして帰ってきて、お風呂に入ろうとしたら腰に激痛がはしりそのまま気を失い、気づいたら洗い場に倒れていました。浴槽の方に倒れていたら命は無かつたかもしれません。そのようなことがあり、何か有れば人にな

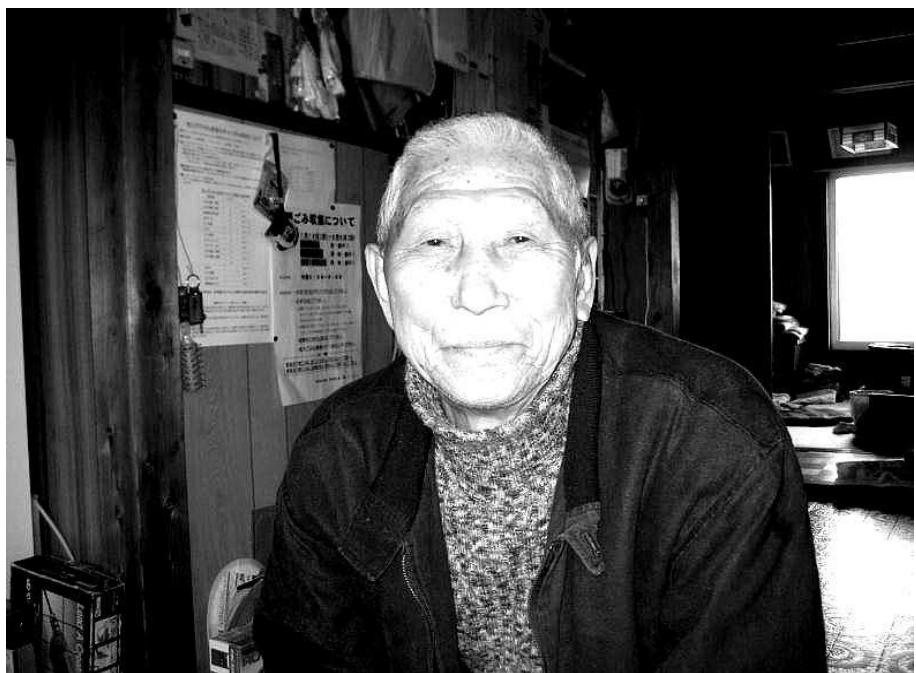
迷惑を掛けたると思い、漁はやめました。

生活のため、子供を育て学校にやるために色々なことをして多少無理をしても働いてきました。

東京の子供達は、来る様に言つてくれますが長くなれば親子でも遠慮です。ホームや老人クラブの集まりも耳が良く聞こえなくて、話があまり出来ないから行きません。普段は話に来る人もいませんが、薪をこしらえて自宅で一人で頑張っています。

コスモスの会の弁当、暮れの社協の弁当があります。

(以上聞き書き)



疎開と終戦後

昭和四年三月八日生 八十四歳

梅田 武男（文五隠居）

昭和十八年頃から太平洋戦争も激しくなつてきて、房総の沖で爆撃機に船が襲撃されたというようなことが、ぽつぽつとたまに聞くようになつてきました。そういう訳で神津でも灯火管制（夜間、空襲に備え、灯火を消したり覆つたりして光がもれないようにしてること）がしかれるようになつたせいで、灯りを点けなければならぬ夜の漁には出られなくなつてしましました。その年の春になつて、いくらかトビ魚が獲れるようになつて船を出しましたが、宵の内に一網か二網や

つただけで帰つてこなければならぬ状況でした。

思うような漁もできなくて、何だかんだ言つてゐるうちに夏になり、時々、尾翼の高い『四発』^{よんぱつ}と呼ばれたプロペラ

が四つ付いた飛行機が上空を通るようになりました。聞く

ところによると、当時の日本にはまだ4プロペラの飛行機というのはなく、『コンソリーダーテッドB 24』^{コンソリーダーテッドB 24}で、悪名高き『B 29』の前の機種になるそうです。この



コンソリーダーテッドB 24

『四発』が磯遊びをしていると恩馳の方をちよくちよく通つて行つた
りしていました。この頃はまだ漁船をせちがう（襲撃する・いじめ
る）ようなまねはせず、神津に機銃掃射することもありませんでした。

そしてその年が暮れて十九年になつてから、南の横山の方から出て
来ては村の上を通りながら機銃掃射をしたり、爆弾を落としたりする
ようになりました。そしてこれをきっかけに神津にも疎開の話が持ち
上がつてきたのです。

当時この辺の八区の区長は『在吾』の渡辺丈太郎さんで、そしてこの
付近は三番組になつていて組長は『どうゆう』のお爺さんで、たしか
石野田常五郎さんだつたと思います。この人達の所には朝に晩に疎開
の相談をする人が來たみたいで。すでに近所の『半六』は伊豆に疎
開していく、十八年頃からぼつぼつ内地に親戚等がある家は縁故疎
開をしていましたが、縁故の無い家は集団で行くより仕方ありません
でした。

ろくな食べ物が何も無い頃でしたが、昭和十九年もトビ魚の獲れた
年でした。でもトビを積む定期船も敵の飛行機が怖くてなかなか来れ
ませんでした。そうは言ひながらも、やっぱり危険をおかして来なけ
ればトビも日干しになつてしまします。神津は秩父山に『通信隊』が
いて状況を流していましたが、小笠原からこっちの島まで、あちこち
の情報が無いと走れないでの、定期船というよりは不定期船になつて
いました。

ちなみに聞いたところだと、その頃はまだこの島には『ラジオ』は十
台あるかないかということでした。役場、学校などにはあったのでし
ようが、私達は『ラジオ』なんていう言葉も知らないような時代でし
た。

昭和十八年に疎開の話が持ち上がりつてから、そういうしている間に
十九年をまたいでしまいました。八区のこら辺は二十年六月の三十

日に神津を出るということが決まって、みんな荷物をしたためて荷札も付けて用意をしていました。ところがこういう時節で船がなかなか来れず、日にちは憶えていませんが、七月も一週間が過ぎた頃にやつと船が出ることになりました。

疎開といつても全員ではなく、十七歳以上は神津に残されました。その時私はまだ十七歳になつていなくて疎開に行く仲間の方に入つていました。そしていよいよ荷物を載せて、ふーオ子もはー子も（誰も彼も）今産まれたばかりの赤子も乗せ込んで、敵機に見つからぬよう夜中に出港しました。船は『伊勢一丸』という船で、何処の船か知りませんが、強制疎開なので民間でなく役所が手配した船だと思います。

トコトコ走つて行つて、大島の『元村』現在の『元町』の沖まで来た時に、エンジンが傷んで走る事が出来なくなつてしましました。敵機が来たら女子供もみんな死んでいるところでしたが、後から思い返す

とその日は良い塩梅あんばいに金曜日にあたつていました、金曜日は米軍が礼拝のためなのか攻撃を休むことが多い日で、運良く爆撃機も来ませんでした。

そしてまた良い塩梅にその日は大島から伊豆の国に向けてかなりの速さで流れる潮しお（潮流）でした。一緒に乗つていた『とんま』のじいさんが機関士をしているので、機械場に入つてどうにかエンジンがかかるようになつたのが、朝の八時頃に流されてから昼も過ぎて二時か三時頃でした。その間速い潮に流され流されしながら、だんだんと伊豆の国も近くなつていきました。でもやつと走り出して『川奈』のちよつと手前の『日蓮崎』に近づいたあたりで、また機械が止まつてしましました。ところが、ここもまた運よく川奈の船が一槽通りかかつて、五倍もあるような私達の運搬船を引いて、やつとの思いで伊東にたどり着いて助かることができました。

伊東に着いても、今度は線路の情報が悪くて汽車が走らず、足止め

をくつてしましました。荷物は全部駅のホームに山積みにして、交代で番をして良くなるのを待っていました。一週間くらい待つてやつと出れるとのことで、朝汽車に乗り込みました。伊東線なので熱海までしか行きません。熱海で乗り換えて東海道線で東京へ向かって走りました。これも昔の蒸気機関車なので何故か解りませんが途中で二回くらい止まつてなかなか発車せず、やつとやつとで東京に着いて、今度は神田駅から中央線に乗り換えて立川駅まで行き、立川で青梅線に乗り換えて、日が暮れる少し前に氷川に着くことができました。そうは云つても女、子供、全員が江戸（東京）を知らない者ばかりで、一人でも居なくなれば大事な^{おおごと}ので、役員はさぞ大変だったと思ひます。

氷川駅が終点で多分午後四時頃でした。氷川駅は今の奥多摩駅になるんだと思います。十区の人達はもう着いて奥多摩の方に行つていて、私達八区の仲間は遅い方でした。そして氷川駅で待っていたのは赤牛が引つ張る牛車でした。荷物はまだ着いていなかつたのですが、人間でソバが蒔いてありました。

だけ牛車に乗り込んで、日原の『大沢地区』という所に向けて多摩川の源流をさかのぼるように、流れに向かって左側の川壁をどんどん進んで行きました。畑の無さそうな地域で、路の脇にずーと一キロくらいの長さでソバが蒔いてありました。



現在の奥多摩駅

七月の十五日か十六日、神津を出てから大変な思いばかりして、やつと到着できました。大沢地区はとにかく平らな所が全然無い部落で、川に下っている五十度くらいの傾斜地に、川の方につつかえ棒みたいに柱を立てて家が建つていて縁の下はも

う崖という感じでした。小さな学校があり『伝エ』の人達はそこに入つて、私達は学校の下手に『木こり』の寝泊りする小屋があつてそこに入りました。

杉山の中で水は豊富にあつてあちこちに流れでいて、小屋には風呂もありました。牛車に積まれて荷物も着いて、ここでの生活が始まりました。

ある日、燃木^{もしき}も無かつたので、切つて積んである杉を割つて小さくして燃料代わりに使つていたら、杉山の持主から文句が入り大目玉をくらつたことがありました。勝手に使つていたので当然ですが、隣組長の『どうゆう』のじいさんが話をして納めてくれて、細い木なら燃やしてもかまわないという許可を貰うことができました。

そうしているうちに八月になりました。何の知らせも情報も入ってきませんでしたが、少し上の方に八丈島から疎開してきた人達が十二、三人いて、電気が無いのに情報を持つていました。たぶんポータブル

のラジオかなんかを持つていたんだと思います。「今日は良い情報だ」「今日は悪い情報だ」「立川の飛行場が爆撃をくつた」等々の話がありましたが、本当か嘘かも解らず、戦況がどうなつてているのかも知りませんでした。

小屋のすぐ下で東京都が川の向こう岸に渡る橋を作つていて、監督をしている清水さんから「遊んでいてもしようがないから働けよ」と誘つてくれて、そこで働く事になりました。向こう岸に二m弱の道が川上に添つてあって、そこに枕木が敷いてあり二、三人でソリを引つ張つて川上に行つて、石垣に使う『けんち石』をソリに三、四個積んでブレーキが付いていないので、ずらしながら滑らせて運ぶ仕事でした。

でもその他はたいした仕事も無く、監督^ら等が青梅から通つてているので戦時中で現場に来ない日があり休みになる日がありました。そんな日には、山奥の疎開地なのに海に潜る時の水眼と小さな『小やす(付き

ん棒』も持つて来ていたので、川の中を一人で泳ぎ廻つて二十九三十cmくらいの『ヤマメ』や『川マス』などを突いていました。すると山國の人達には水の中を潜つて泳いでいるのが珍しかったのか、両岸が黒山の人だかりになつていました。

私は淡水の魚は食つたことがないので捨てたりしていたのですが、監督がその話を聞いて「お前は今日は昼から仕事をしなくていいから魚を突きに行ってこい」と言われました。そして川に行つて小さな滝壺みたいなところを見るとヤマメや川マス、黄色い魚なんかがいたので、ほんの三十分ぐらいで五、六匹突いて戻りました。すると監督が喜んで、魚の無い時代で貴重だったのか、明くる日には色々な物を土産に持つて来てくれました。

疎開に出る前に、神津で多幸から村までの都道が『戦車道路』として構築されて、軍の命令で皆手持ち弁当で通つて、ただ働きみたいなものでしたが、最後の日に日当が一日四円でした。ところがここで東京

都の仕事をしたら七月の二十日頃からわずかな期間でしたが、一日十円貰えました。ずいぶん値の良いもんで、疎開に行つて逆に稼いできました。(笑)

そしてまだ終戦の一週間前ぐらいでしようか、『政八』の前田栄吉じいと娘三人が日原に疎開していたのですが、一番小さな娘が親に言われたのか氷川で何か配給（大豆・ニシンの薰製等）があつたみたいで、午後の三時頃私達の居る所を白い袋を背負つて通りました。日原までは男の足でも一時間以上かかり、女の足では二時間でも容易ではありません。すると私のお袋が「にしやあバカじやあないな、付いて行つてもらいたいしかいで、ぐずぐずしてーるずらじえん」「にしやあ付いて行つちゃーればいいじえん」と言つてきました。はい晩げん（夕方）になるつつーになーと思ひながら聞いてみると、「はい遅くなるしかい、恐つかない」ということでした。「恐つかなきやーどこせよ」と

言つて荷物をしつたくつて（奪つて）背負つて「俺やなあ、足は速いしかいでなあ、一生懸命に歩けよ」と言つて歩き出しました。日原は行つたことがあつて知つていたのですが、帰りは暗くなるので実は私も恐つかなくて、とにかく日原までとつ着かなきやあと、かなり早足で歩きました。途中で二回程休みましたが、いい塩梅で高い方を向いてどんどん歩いているので、沈むお天道様てんとうさまを追つかけるようにななか日も沈まず、やつと日原にとつ着きました。家が十二～十三軒程ありましたが、『此処ここが人間の住むところだかあい！』という感じのひどい地区でした。

学校みたいな所に政八の人達は居て、とにかく荷物を渡して「俺おいや行くどー」と言つて帰ろうとしました。すると今の私ぐらいの年寄りが「今から下くだるのか」と言うので「今から大沢までいくだよ！」、自動車があるだな？」と言うと、「まあ、黙つて待つて一れよ」と言いながら、針金が付けてある空缶ガングラを二つ持つて来てそれに紐を結んで「熊が

出るからなあ、これを引きずつて行けば砂利道だからガランゴロンと音がして、熊の方が分かつているから丈夫だ！」ということでした。なるほどなーと思つて、熊が出たらそれこそ恐おそかないでの、そのガンガラをガリガリーバリバリー！と引つ張り引っ張り、引っちょぼきながら歩いて、四十分ぐらいで帰るこ



とができました。

食糧難やら神津や東京の現状を見るにつけ、これで戦争つつうもんに勝つもんだろうかなあ・・・とつくづくそう感じていました。

山の中で上を見てもいくらも空は見えないのですが、それでも飛行機雲を引いている飛行機が昼間日中も通るようになり、『はいこりやあ戦争にも負けたなあ』と思つていきました。

そうこうしている内に八月も十日になつて様子がおかしくなつてきました。この時期、誰の目でみても戦争に負けるということは、十六歳の子供の私でも分かつていきました。

そして八月十五日の終戦になりました。終戦は誰が教えに来たわけでもなく、八丈島の人おらが「俺あ負けるためにここに來た訳じやーない！」と騒いでいて、『あにいこいつらあ騒ぎをしているだらうなあ？』と思ったたら、「戦争が終わつた！」と云い、終わつたはいいが、「負けた！」ということでした。まあ、負けるのはもう解つていたこ

とで、どうという事ではなくて、『まあこれで世の中は静かにならーなあ』と正直そう思いました。

そして八月の二十四じゅうよ・二十五日になると、その頃桜井徳三郎さんが助役をしていて、たしか村長は石田彦治郎さんだつたと思ひます。

その桜井さんが来て「にしやあ、明日、伊東の連絡所まで行つてきてくれ」と言われました。朝、三時頃起きて行かないと一番電車には今のご時勢だから晩げんまでに着くかどうか分からぬ、とのことで切符をもらいました。「これ一持つてどうするだ」と言うと、「この切符を持つて朝乗つて、途中に『川井』かわいという駅があるからそこで降りて、歩いて行つても二十分ぐらいのところに十区の仲間がいるから、そこから椿油をリュックに詰めて伊東駅まで行けよ、椿油は役場の物だから、にしやあそこで帰りの切符と飯をもらって一晩泊つてから来よ」ということでした。

東京に行つたことも無い、まだ十七才にしかならない

『江戸水権兵衛』

(東京を何も知らない田舎者) の人間に『行け』と

言うのも酷つこいことだなあと思いましたが、行けと言われたので行くことにしました。案の定、川井の駅で切符に『途中下車前途無効』と書いてあるのに気付き不安になりましたが、改札を出る時に、こういう訳で公用で来たけど、どうしても此処で寄らなければならない所があるんで、この切符に裏書をしてまた乗れるようにしてくれ、とのみ込んで事なきを得ました。もし気付いていなかつたら切符を渡してしまい、伊東まで行くどころか、大沢まで戻ることもできなくなるところでした。

そして川井の駅で降りて上がって行くと十区の仲間が居て話は通つていたので、ます 杵はかで量はかれば六升しょう (約九kg) ぐらいの椿油をリュックに詰めて出ました。そしてそれを背負つて立川駅に着いた頃、乗り込んで来る人の中に黒いおじい等(黒人兵)がいて、初めて黒人の人も見ましたが、もう東京に占領の外国人兵が入り始めしていました。

私もどう乗換えて行けばいいのか分からずまごつきましたが、何とか東京行きに乗れて神田駅で東海道線に乗り移ることができました。進行方向の右側が空いていたのでそこに座りましたが、当時は蒸気機関車で石炭の質も悪く、真っ黒い煙がすごくて窓を開けることもできません。それでも十分ぐらゐすると窯かまの温度が上がるのか煙も出なくなりました。そして何気に窓の外を見てみると、新橋を過ぎたあたりから『あんだろうなあ、こりやあ？・・・この外に見える物は』と思ひながら見ていたものは、全部、焼け死んだ人間の屍しかばねでした・・・。何の気なしに見ていたのが、一瞬にして身の毛が逆立つような感じがしたのを忘れることができません。まだ遺体の整理ができるいなかつたのでしょうか。

平塚止まりだったので降りて汽車を待つて、熱海で乗換えてやつとやつと着いたのが午後の四時過ぎでした。

駅の近くの、名前は忘れましたが旅館に行くと、役場の人人が居て、

椿油を預けて、そこで帰りの切符と弁当と飯を食わせてもらいました。そして此処に泊まれるのかと思つていたら、「今夜、一番ホームと二番ホームの間の荷物ホームに、神津行きの荷物が船が出なくて置いてあるので、そこに何人か番をしている人が居るから、その仲間になつて朝まで番をして、それから一番汽車に乗つて行けよ」ということでした。

そして行つてみると松本治男兄はるおと『平内』の宮川栄吉さんともう一人、三名で番をしていて、山のような荷物を並べて真ん中を低くして、そこで寝られるようにしてありました。荷物の中を聞くと、米と煙草と、忘れましたがもう一品入つていると言つていました。向こうのホームにもあり、それは大島の分とのことでした。

夜になつて自分の番になり、他の人は皆寝入つっていました。起きて巡回をして、便所に行きたくなつたので、ホームの便所に行つて戻つて来ると、泥棒が一人居るのを見つけました。そして見てみると七十

才にもなろうかという爺さんでした。竹の筒を持つて米を抜きに來たみたいですね。『こりやあしょがないなー捕まえるも、もごつたい（可哀そだ）なあ』と思つて、情けがあつちやあ番人はできないのですが、頃合いを見計らつて押さえつけて、竹筒を持ち上げてみると、せいぜい二升ぐらいの重さでした。米俵に竹を突っ込んでもなかなか米が出なかつたんだと思ひます。「これ一回だぞ！」と、「いかい声を出すと皆が目を覚ますから、これを持つて早く逃げれ、そつちから行くと見つかるから、こつち、こつちから！」（笑）と言つて逃がすと、子供の私に向かつて頭を下げて拝んで行きました。七十ぐらいの老人が、食うものが何も無かつたんだと思ひます・・・。そして何も無かつた振りをして番を交代しました。

朝になつて汽車が出る頃になりました。「俺や行くどー、走るだか走らないだか分かんない汽車に乗つて行くもんが、今日中にとつ着かなきやあ」と言つて行こうとしました。すると治兄はるいが「おう！御苦勞

さん」と言いながら「待つて一れよまあ、これをリュックサックに入
れていけよ」と袋を差し出しました。「あんだだ一こりやあ」と聞く
と「黙つて持つてけよ！」と手渡しました。持つてけよというので貰
つて汽車に乗りました。朝の四時頃でした。夏なのでもう明るくなつ
てきていて、『あにーくれたあろうなー』と思い、途中で開けてみる
と『光^{ひかり}』という煙草でした。十本入りで四十五銭するものが二十箱も
入つていました。神津に送る荷物の中から取つて駄賃代わりにくれた
んだと思います。今と違つて当時の煙草はとても貴重で、天皇陛下も
あまり手に入らないくらいで、煙草なんて物は夢のまた夢という時代
でした。

お袋も煙草を吸うので「こりやあ、いい土産ができたなあ」と思つて、
その煙草を吸つっていました。すると、近くに座つてゐる男が、いかに
もその煙草が、けなりらしく（羨^{うらや}ましい、いいなあという感じで）こ
つちを見ていました。「吸うか？」と言つて出すと喜んで貰つて、何

処の出の人か聞くと、大島の元村の出だというので、こつちも氣をゆ
るして「じやあ持つてけよ」と二箱あげました。「ありがとう、こん
な煙草は何力月ぶりだあ！」と言つて、ここでもまた拝まれてしまい
ました。そしてやつとやつと大沢に着いたのが夕刻近くでした。

それから疎開地の大沢地区で幾日暮らしたでしようか。九月の十日
にはまだなつていなかつたと思います。汽車の都合がついたといふこと
で、皆で伊東行きに乗り込みました。その時には東京もいくらか整
理がついていて死骸がゴロゴロしているようなことはありませんでした。

所々にMP^{エムピ}（米軍陸軍憲兵隊）が立つていました。そのMPを汽車の
窓から横目に見ながら止まっちゃあ走り、止まっちゃあ走りしながら
東京駅に着きました。そして東京駅から出て見ると、何と今の銀座か
らずうつと京橋あたりまで建物は一件もありませんでした。
まつ平らが続いて神奈川の平塚の方まで見渡せます。眼を疑うような

光景でしたが、本当に京橋郵便局が一件突つ立つていて、聖路加病院が一件突つ立つていて、もう一件浜の方に大きな建物が見えたぐらいで、でこぼこも無い、まつ平らな焼け野原でした。

なんだかんだ言いながら伊東に着いて、皆が旅館に割り振られて泊ることができました。二～三日してから神津行きの運搬船が出ることになって皆その船に乗りましたが、私は若い者なので荷物の番やら整理をしながら残されて、また二～三日伊東に泊つて、九月十二～十三日頃に次の

船に乗り込みました。そして利島沖まで来て、神津の島が見えた時には自然と涙が出てきました。

いよいよ神津に着いて浜に降りて周りを見渡した時は、どんな鬼の目からも涙が出らあ、という感じでした。マンネンジラ（今の船揚げ場）には船は五杯ぐらいしか残つていなくて、他は全部焼夷弾で焼落していました。憶えがあるのが『庄エ』に『水神丸』^{すいじんまる}という十二馬力で焼玉エンジンの船があつて、マンネンジラの南側の一番上に揚げてあつて残っていました。

そして私が乗っていた『久エ』^{きゅうえ}の『福一丸』は、今の『山長』^{やまちよう}の下に揚げてありましたが、『どうなつてーるろーなあ』と思つて行つてみると、船は焼けてしまつてエンジンだけが、まるで七～八つの子供のようなくつ立つていて思わず泣けてきました。

疎開を行つてから終戦までの二ヶ月程の間にこの有様になつていて、河原方面は疎開に行く前に半分ぐらい焼けていましたが、帰つて



来た時は家が一件も無いという状態でした。飛行機は南の山の方から出て来て爆撃するので、弾も火事も河原の方に行きやすかつたんでしょう。そして家に帰ると人間の居ない所に二ヶ月も夏草が生い茂つて、まるで山の中でした。

それからが大変でした。実際、疎開していた方がまだ良い生活ができていました。親は大変だつたと思います。六月いっぱいまで神津にいたのでイモが植えてあって、九月の半ばにはポツポツと下がり始めて親がたまに掘つてきて食べることができましたが、夏場のことでの日葉もないし、沖に出たくても船が無く、船が有つてもエンジン油が無いからどうしようもありませんでした。他には、私は体が達者だつたので、風なぎがよければ『つまり』の周りで海の中に入つて魚を突くか海老を捕まえるぐらいで、軍の備蓄がけつこうあつたので、そんなのもあつてなんとか生きていられたのかとも思います。本当に明日の食の見込は何も無く、今日を生き延びることしか考えられませんでした。

小学校の坂を上がつて行く所に忠靈塔ちゆうれいとうという石で造つた塔がありました、高くて十五mくらいあつたでしようか、それと今の学校の西側には御真影ごしんえいといって天皇陛下の夫婦の写真を収めたコンクリートの家がありました。

そして生徒は学校に入る時も、放課後学校から帰る時も、そこで一礼し深々と頭を下げました。一口「天皇陛下！」と言えば、もう良いとか悪いとかということは別の問題になるんです。そして『天皇陛下』と言葉で発する時には『気を付け』をして直立不動の姿勢を取らなければいけませんでした。

何か不思議な感じがしないでしようか？ そうした人間の育て方をしたから『歪いびきな人間』が多く出来たんだと思います。ああいう『國家統一』というのは良くありません、まったく良くありません！『個人崇拜』と同じことです。それを明治の時代からやつていて、私は理屈っぽい方なので、子供心にも『こんなことが長く続いて良いもんだろう

かなあ？』と思つていました。

そして終戦になり、米軍の見廻りが来る！ということになる

と、その忠靈塔は壊して

木端微塵こつぱみじんにしました。御真影も

どこにやつたのか知りません

が、家も何も全部ぶつ碎きました。

そして今の『善次』の下の、鳥居と相に向かいの場所に小さな屋敷があつて『忠魂石』という塔が立つていましたが、それも粉々に小突いてしまいました。忠靈塔にしても忠魂石にしても戦没者を慰靈する為のもの

なら、私に言わせれば何もぶつ碎くことはないと思います。別に向こうが（米軍）ぶつ碎けしたら、その時はぶつ碎いてもしようがないにしても、歴史を見る為には、やはり置いておけば良かつたんだと思します。でもそんな話も無い内に、『来て咎められたつて一ば、ぶつ碎いちやんびやー』（咎められたらまずいから、壊してしまおう）ということでした。『こゝれは良くないなあ』と思いました。この島中の人が出て来て、形跡が分からぬように粉に小突いたんです。

粉に小突くのもいいけど、『これが太平洋戦争の結末なんだ！』といふもののを、『軍国主義というものはこういうもんだ！』ということを後世に残すのなら、置いておいたつていい訳でしよう、アメリカの父等ちとへらが、マツカーサーが壊せ、と云つたら壊せば良かつたんですね。まあその頃の人の考えそうな事でしたが、軍人や村の役人からしたらなるべくなら当たり障りの無いように前もってしておけ、という事だつたと思います。





デイサービス（やすらぎの里）にて

そうやつて何とかかんとかしている内に冬になつて、当時この島は、まだ今の二月か三月頃の陰暦の旧正月をしていました。食べる物が有ろうが無からうが、日は東から出て西に沈んで・・・日は暮れます。

戦争に負けてすごく業腹ごうはら（腹が立つ）な面もありましたが、やっぱり、世の中の流れっちゃあ、しょうがないもんです・・・。

（以上聞き書き）

昭和に生まれて

昭和二年四月十五日生 八十五歳

桜井武子

私が生まれた日は昭和二年の四月十五日です。この日はちょうど『長浜祭り』の日なので、命の誕生を頂いてありがたいなあと思っています。父は鈴木藤次郎、母は鈴木タカの一番最初に生まれた長女です。

実家は『藤次郎』^{とうじろう}で世襲的な『法吏集』^{ほうりしゆう}の家でした。法吏集とは禰宜（神職の職名の一つで、宮司を補佐する者の職称）のことです。世襲的につきていました。あと『惣七』^{そうしち}や『よそうべい』も法吏集でした。法吏集をしている三軒共が『鈴木』の名字で、この鈴木姓の発祥は、

ルーツは何処にあるのかなあと思つていきましたが、静岡県の『韮山』^{にらやま}だそうです。

私は尋常高等小学校まで行くことができましたが、悲しいかな父が体が弱くて、本業は漁師をしていましたが、どんなに漁があつても神社の仕事になると漁を休まなければなりませんでした。だから母（鈴木タカ）はそういう面では意外と生活は苦しかったんじやないかなと思います。家は『藤次郎組』という『合』^{ごう}をしていたので、小さな時から太鼓を叩きながらの『ヤンレー節』を幼心に聞いていました。

『大堂』の叔母さんは大正末期に女学校を出て、母の弟の桜井徳次郎叔父さんは、憲兵特務曹長までした人でしたが、母は無学で、産んでくれたお婆ちゃんの体が弱くて学校にも行けず、家の手伝いで薪拾いに歩かされたそうです。他の人は学校の風呂敷包みを持って楽しそうに学校に通っているのに、私の母は学校にも行かせてもらえないくて

哀しい思いをしたと言つていました。学校に行ついたら頭も良かつたんじやないかと思います。

母は自分には凄く厳しい人でした。そして私にも厳しくて、お父さんが居ると遠慮していましたが、私のことを可愛くないとつていつも強くぶつ叩かれたりしていました。『なんでこうなのかな?』とは思つても、父に打ち明けられない私がいて、子供時代は寂しくて、小学校四年生の頃には『本当の親がこうして子供を痛くぶつ叩くものかしら、何処かに本

当の母ちゃんが居るじやあないろーかなあ』と思つたりした時もありました。

そしてお姉さんにも厳しい人でした。母とお婆ちゃんとが問答しても、いつも婆ちゃんが最後はつぶやくようにして負けていました。でも私はお婆ちゃん(鈴木よし)の優しいところに惹かれて懷いていました。『婆ちゃん子』で、『和吉』の二つ上の姉さんと一緒に育ったのですが、和吉の姉さんが婆ちゃんのことを『母』と呼んでいたので、私も祖母のことを母、母と呼んでいました。夜も三人で一緒に寝て、私の方を向いて寝ないと怒つて、和吉の姉さんも「オイが方を向け」と言つて、婆ちゃんのことを取りつくらして(取り合つて)寝ていました。(笑)

だから母にしてみれば自分よりも姉に甘つたれたり懷いている私のことを、我が子であつても可愛くなかったんだと思います。時々、母の気持ちを思い起こして、母に謝つてゐる時があります。『堪忍よー』



してね。（笑）

子供の時は一緒に遊んだりする友達は全然いませんでした。婆様に「話しーしてえ、話しーしてえ」とねだると、「今日は『のんのー（寺の和尚）』がこういう話はなしーしてくいたあやあー」とお寺での話をしてくれました。寺の和尚さまは優しい方で篤信とくしんな人でした。『如来様の香烟こうえん』といつて畳を作つて、「絶対にこいと入つてウンチしたりオシッコしたりしちゃあダメだじょー、ここは大事な如来様にあげる香烟だしかいで」と言つていました。

婆様は『半内はんない』の出の人で、四十九歳の時、三つ違たがいのお爺さんが五十二歳で亡くなつて後家になつていきましたが、敬うやまいの気持ちというのがあつた人でした。「一時いっときでも鳥の水を吸う間まも無く働かなきやあだあやー」と言いながら「今日はなあ、寺の庭の篠ほうきにする笹を『ありま』の所へ切りに行くばーやー」と言つて畳の仕事を見切つても、そういうことをするお婆ちゃんでした。

物心ついた時には婆様に「法吏集の育ちだから、普通の『各』とは違う」とよく云われて、厳しくて、友達と遊ぶようなこともありますでした。また逆に「氏より育ちだじょー」（家柄や身分よりも、育つた環境やしつけのほうが人間の形成に強い影響を与えるということ）と何度も云われました。そういうことを子供の頃から聞かされて生きてきたせいか、今は非常に、『あーあの時はああして暮らせて良かったなー』と思つて、自分で自分を褒めている私がいます。

そして「あにー言われても『あんもん』が良いしかいでなー」（何を言いつけられても段取りが良いねー）と言つてほめてくれた言葉を、今しみじみと思い起こことがあります。今考えると、そういうふた祖母の姿というのは素晴らしいなあと思います。今でもお婆ちゃんには合掌しています。

疎開にも行きましたが、父母達は下田の『蓮台寺』に行き、私達は西多摩の方で場所は別でした。尋常高等小学校を卒業してからが問題

で、大東亜戦争が昭和十六年の十二月八日に始まつてしました。あの時の戦争が無かつたら、自分達の人生は変わつていたんじやないかと思ひます。

卒業して東京に出たら、すぐに四月頃から空襲が始まつて、あの時は凄く怖かつたです。蒲田の洗濯屋さんの家で働きましたが、奥さんはいい人で旦那さんはお爺さんの様な人で、長男との親子三人でした。が、その息子も戦死していなくなつてしまつて、結局そこには何ヵ月もいませんでした。

そしてそこから叔父の所へ戻つて、東京は焼け野原になつてしまふし、都會で何をするということもできないので、神津へ帰つて来ました。帰つて來たらきたで今度はやつぱり、そこにお婆ちゃんと私と母が居るわけで、なにかと三人で対立が始まつてしまひます。『いやあう、こりやあ困つたなあ』と、『こんなこつたら、嫁にでも行つちやあろーかなあ』とも思つていきました。実際嫁に行つた先も大変でした

たが・・・。

『萬作』に嫁に行くことになつたきつかけは、『三宅』のお婆ちゃんが今の『栄三^{えいざ}』の前にあつた『バタ屋』でバターを作つていて、そこで「萬作に嫁に行け!」「いいお母さんだしかし!」「いい兄いだしかしな、行け、行け」と説得されて、半ば騙^{だま}されたようなもんで、乗つかつちやつて、(嫁に)行つちやいました。(笑)

親は、まだ歳もいかないし、嫁に入つてすることも何も知らないから、くれらんないと言つていましたが、私は意地を噛んでそのまま萬作へすんなりと入つてしまいました。

萬作に嫁に入つて待ちかまえていたのが、三人のお姑^{しゅうと}さんでした。周一さんのお母さんの『おとめ』さん、周一さんのお婆さんの『おふく』さん、そして桜井浅吉爺さんに奉公していた『おむら』さん、という学問を受けていない明治女のお姑さんが三人、ずらずらつと控えていました。

と仲良くして、お母さんは世渡りが上手いなと思つていました。私は『はてな、これでいいの?』という時も沢山ありましたが、いつもこなーされて（悪口を云われて）いましたが、こつそりと立ち聞きなんかしたこともなく、相手に気付かれないように、そつと忍びやかに身をかわしていた私がいました。のんびりもしていて、畑に行けば、あつけらかんと歌を唄つたりして、まるで天草を潜る時に、瀬が出ている所があると、引きずられたり持つて行かれたりしながら潜るように、『人生もあんな時があるんだ、うまく泳げて良かつたなあと、三人の姑に対して、ああいう風に暮らせて良かつたと、私は今まであの頃の自分をほめています。

息づまると書物に触れて、読むことによつて心が開けていけた自分がいました。何か難問にぶつかると仏様の履歴書だとか、念仏から何から色々読んで、間違つちやあいなかつたと思うことも沢山ありました。『前ぜんじょう生の無い人は無い』という仏様の教えで、おふく婆さんに、

最初の頃の萬作は今の場所ではなくて、牛を二頭飼つていて、よく牛の餌を採りに天上山までも草を刈りに歩きました。本当に一生懸命で働くという家で、まだお店はやつていませんでしたが、米屋で配給米を扱つたり、終戦後に開店して色々な物を売つていました。私のお母さんは萬作に来ると、おふく婆さんと仲良くして、お店に行くと、おむら婆さん



萬作の庭で娘 寿子と

私が店に入ろうとすると、（此処は、にしが来る所じやがない）と大手を広げて『通せん坊』されたり、「にしゃあ、おいが死ぬまで嫁だあ」と言つて凄くいじめられて忍従をしいられた事も、そういう時代であったのかも知れませんが、よっぽど私は萬作のおふく婆さんに前生で意地悪ばっかりしてた事があつたのかも知れない、と気なぐさめかも知れませんが思うことができました。

なんでも活字に触れて読むことは、自分の心の諫めにもなるし、良いことだと思います。

『けして人の悪口を言うじやない』という祖母の教え、これは幾つになつても私の中に叩きこまれていて消えることはありません。『人を責めようとする己の心を見つめ直しなさい』、と、そして幾つになつても読むことも大切、学ぶことも大切、そして今は八十五歳になつて、見えない未来に向かつて『良き人生は一日の丹精にあり』の格言が身にしみています。

昔、萬作のお母さんに「人になあ、気が良いと言われる者は、バカが言われるだ！」と言われて、『あーバカでもいいんだ、バカの修業もあるんだ』と思いましたが、そういう言葉を言われても言い返しはしませんでした。

『この人がこんな言葉を言つていいの？』と思つても、そういうことをいうことより、軽はずみな言葉を言うもんじやあないな、言葉つていうのは自分を表すというのは本當だなと思ったのは、その人と現在暮らしているのに感謝の念頭を持てない、これは教育の根源が悪いからこうなるのかなあ、こういう言葉を使う人はちょっと心根が豊かじやないな、と思いました。

『そう（悪く）云われている人がいるつちやーやー』と人の噂や悪口を聞いても、まず一步下がつて、『人を責めようとする己の心を見つめ直しなさい』と、あー読むことによつて頂くありがたさつちやあ、こうしたことなんだとか、そして例えば人に『つんぼー爺や』（人

の言うことを聞いていない、耳が悪い）と云われても、自分のこつちの心じや寂しい哀しさがあつても、逆に『堪忍よー、聞こえなかつたおいが悪かつたあ』とか『あなた聞こえてて良かつたねー』とかいう相手を思いやる心、『顔より心の柄なんだよ』という言葉もありますが、こういうことだろうなあ、と思ひます。

心に何か衝撃的な事があつても、読むことによつて開くという心の磨きというのは、これは死ぬまで続くんぢやないだらうかという気がします。

また『新造』のお婆ちゃんが『羽端』の坂を漬けもの樽をかついで上がる時に「にしが体にやあ、これはなあ重たいしかで、無理だじよー、にしやあ提ぐなよー』と言つてくれた、あの言葉は有難かつたです。

『金長』の野は怖かつたです、『長根』の野も哀しかつた、『お観音』の野も切ない思いをして、提ぎ揚げるのに容易ぢやなかつたです。昔

の人は遅たくましかつたなあと思います。

自分が人に施ほどこした事は忘れても、人に受けた恩を忘れないように、

今でも『新栄樓』
のお父さんを見る

と、お婆ちゃんを思い出して感謝しています。

『お陰様』かげさまという

言葉も、お婆ちゃんからよく云われていました。いつも

も祖母がそばに居てくれてありがたいな、と思つた感



79歳誕生会 デイ・サービスにて

謝が今でも忘れられません。今のお婆ちゃん達はどうやつて孫達に教えているのかなあと思う時があります。余所様の事ですが・・・。

ジュリアの墓がある流人墓地も長年掃除させてもらつていました。ジュリア際も四十年以上やっていますが、その間こつこつと掃除していました。今は、『良き人生は一日の丹精にあり』の格言を肝に銘じて、自らの発心でお寺に行つて水子地蔵尊様、六地蔵尊様等々、お寺の庭をあちこち掃除したりするのを日課にしています。

寺の須弥壇に『徳本上人』様が祀られていますが、神津島に渡りたないと江戸から下田まで来たんだそうです。そして渡れる日を下田の川で日和待ちをして待つていましたが、なかなか風ぎなくて舟が出ないので、また伊豆の山々を通つて戻つて、幾日もしない内に病をいただいて六十二歳か六十三歳で亡くなつた、という本を読んだことがあります。

そして『国誉上人代』と刻まれている塚（墓石）が『お觀音』や『秩父山』

にもあつてびっくりしたのですが、魚の精に対する『買回船』達の塚として立つていて、徳本上人が神津島に渡りたいといつたのはこの国誉上人を慕つてのことだつたんじやないのかなあ？と自分なりに考えたりしています。また夢で、ある方が亡くなつた時に、海のタライの中に、こゝして、僧の姿になつて立つて浮かんでいた上人様がいて、この方は国誉上人様じやないかなあと思つて感動したことがあります。

また、お寺に戦死者の名前が刻まれた『忠靈塔』があります。そしてその中の一人は私のいわゆる初恋の人でした。

そしたらどうでしよう、戦争も終わつていたある日の夢で、その人と『もろみや』の近くでばつたりと行き会いました。沖縄の何処から帰つて来たのか、それとも、さぞかし『十万億土』の彼方から来るような気持ちで帰つて来たんだろうかと思つて「あ、兄い帰つて來たーな」と言うと、ずかずかと来て、ものも言わずにピーンとビンタを張

られました。ただ口約束だけで、「俺が帰つて来るまで元氣でいれよ」と言つてくれて出征した人でした。私には私なりに伝えたい事があつたんですが、戦死して未来が無くなつた悔しさを告げに来たのでしようか。

その時に忽然として考えました。『あゝ、死んだ人に靈魂の無いというのは嘘だ!』と、だから戦争が無ければ、みんな人生が変わつていました。負ける戦だというのは解つていましたが、戦争はみんなが悲惨でした。

戦死者の方々はニューギニアだとか、サイパンだとか、ガダルカナルとか、何も無い処で銃弾を浴びて亡くなつている人達です。だからもつと皆さんも手厚く敬つてほしいなと思います。

今はアメリカさん（米国の教育統制）で変っちゃいましたが、小学校時代は学校に行くと毎朝『教育勅語』を読まされました。私はあの頃の教育のあり方というのは良かつたんじやないかなと思います。

『長幼の序列』、一言にいえば目上に対する敬意とか、一つ歳が大きくて、敬語と言うものを使つていきました。そういう意思表示から始まつて、今はちょっと失われつつあるものがあつたな、と思います。

また昭和四十年の『整運丸』の事故で亡くなつた弟（元治）が、ある時「俺一幸せだなー」と言いました。「どんな風に幸せだと思う?」というと、「女親がいても男親がいない、男親がいても女親がいないつつう家もあるに、俺は親が両方揃つていてありがたい」と言いました。何かこれを聞いて、教育の違いがこういうふうにあるんだなあと思いました。そう言つてた自分は親より先に逝つてしまつて・・・。『親も大切、子は宝』といいますが、何かそういう思想が今の人達には薄れているような気がします。だから、『どうしたものだらうなあ、これで良いの?神津島』って感じる時があります。

みんな歳（命）には定めの無きもんで、亡くなつた、故人になつて逝つてしまつた人（私の息子）の後に、植えた水仙がどんどん、どんど



孫子3代 自宅にて

ん咲いてきます。そしてまた水仙の時期になれば、水仙が好きで植えて逝つた、あの**伴**^{せがれ}を思い出して泣いてみたり・・・、こういうことにも**无情**^{むじょう}さを感じて、そしてその无情の中に、黄色い花びらの水仙を見ると、やつぱりう、なあう、人の命も定めの無きものでっていう阿弥陀様の念佛を信じて、すがっていく私がそこにいます。優しい子でした・・・。

(以上聞き書き)

米寿を迎えて

大正十三年七月二十五日生 八十八歳

山田 ゆき子（しんじ）

私の生れは『石田文衛門』^{ぶんえもん}です。『猫の尻尾』^{ねこのしっぽ}で、末っ子に生まれました。六人兄弟で今は私一人だけです。

子供の頃仲良しでよく遊んだ人は、二歳上の『徳左』の『いせ』さん。この人がボスで、あと妹の『喜美子』さん、『丸源』の長女の『きく子』さん達がお友達でした。もう今の子供達はしませんが、昔はよくみんなで『けつとばかし』や『おじやめ（お手玉）』や『ずいづい』なんかをして楽しく遊んでいました。

学校は尋常高等小学校の高等科まで卒業しました。尋常小学校六年

と高等科の二年で計八年間の学校生活です。私達の時代は、数え年で七つの祝いをしてから小学校に上がりました。一年生の初めての登校の時、お父さんの手に引かれて学校に行つたのを憶えています。昔の校舎は北側の隅^{すみ}にトイレがあつて、すぐ隣の教室で習いました。

私達の頃の授業というと、まず朝礼の時間に『教育勅語』^{ちょくご}を全員で読まされました。『朕（ちん）

惟（おも）フ（う）ニ我（わ）カ（が）皇祖（こうそ）皇宗（こうそう）國（く



小学校四年生の時（前列右）

に)ヲ肇(はじ)ムルコト宏遠(こうえん)ニ德(とく)ヲ樹(た)ツルコト
深厚(しんこう)ナリ』と今でも憶えています。また当時は上級生になると『修身(しゅうしん)』という授業もあって、今の『道徳(どうとく)』でしょうか?

『体育』はやはり朝の朝礼時間に、教室に入る前に体操をするくらいのものでした。『国語』は『いろはにほへと』『はと、まめ、からす、すずめ』『みの、かさ、からかさ』つつーようなもんでした。(笑)科目で好きだったのは『算数』が得意でした。足し算、引き算から始まって、掛け算、割り算と、私達の時代も掛け算は『九九』で習いました。修学旅行は私達の一級したからで、私達は行くことはできず、私はもう奉公に出ていました。

三月二十五日に神津小学校を卒業して、卒業式が終わつたら当時の『高砂丸(たかさご)』で、東京に奉公するため上京する予定でした。でも船が出るまでにはまだ時間があって、母(かあ)に「縁の下の『種芋(たねいも)』の場所から『芋苗(いもなえ)』をふせる(植える)んがに運べやあ」と言わされて、もう水を

吸う間もなく船の時間を気にしながら『バンジュウ(竹で編んだ籠)』に入れて、大急ぎで裏の苗場に運びました。当時の文衛(ぶんえ)の屋敷は今よりずっと広くて裏がずっと『松工橋』の方まであって、そこで梨やら桃やら椿の木も植えてありました

奉公先にいくには『万五(まんご)』の力藏(りきぞう)お父さんが段取りをしてくれて、卒業を待つてそのお父さんに連れられて(連れ去られて)行く・・・という感じでした。(笑)

でもその奉公先に着くと、そこに『兵造(ひょうぞう)』の妙子さんが居て、どつちも知らされていなかつたので、両方共おぼけて(驚いて)しまいました。奉公先は大森にある「石綿内燃機製作所(いしわたないねんきせいさくじょ)」という所で、今思うと、特攻隊の飛行機のエンジンか何かを作っていたんじゃないかと思います。毎日、毎日、作っては、ブー、ブーと試運転して、すぐ持ち出して行くのを不思議に思つて見ていました。

仕事は職の人達の飯炊(めし)で、朝起きて一番先にご飯の釜に火をつけ

て、この家の娘一人も手伝つて一緒になつて働いていました。

でも妙子さんは、すぐに『兵造に嫁に行くだしかい来おー』と呼び返されて、いくらも一緒ににはいませんでした。「ゆきちゃん、すぐ帰つて来るしかいでなあ」と私に言つて神津に向かつたのですが、そのまま帰つてはこられず、すぐ「やうい、行かんなく（戻れなく）なつたしがい、荷物を送つてよこしてえ」と電話が入つてきました。主人から「ゆーき、妙子は来られなくなつたつて云うから、荷物を仕度つてやんな」と言われて送つてあげました。

その主人は、その後、弟さんに会社を任せて、式根島へ釣りを行つたりしていましたが、ある日、兄弟で『ハゼ釣り』に行つた時、風の吹いた日で船が沈没して、主人の方は亡くなつてしましました。式根島の野伏浜のすぐ上に、この主人の孫子達が『菊水旅館』を開いて、民宿もやっているそうで、主人の娘さんも今は九十五歳くらいでしようが、元氣でいるそうです。

ここでの奉公を三年程勤めた頃、今度は私の番で、神津から「ゆきー、まあちいつと家へと来おやー」と云つてきました。荷物も何も持たず、ただ体だけで神津に行きました。するとそこで「働く一ば、はい辞して、早く嫁に行け」と言されました。本当に驚いたと言つていのつか何と言つていいのか、「荷物も持つても来ないに、もう一回おいや取りいと行かなきやあ！あんの事だやあ、こりやあ！」と言つて、逃げだすベーしーすると捕まり・・逃げだすベーしーすると捕まり・・で、（笑）ととととそれでーて（奉公の勤めは）終わつちゃいました。そのままだつた荷物はちゃんと向こうが送つてくれました。

文衛の『おかる（私の母）』婆と、武左の『おたつ』婆の二人で決めた縁談みたいでした。おたつ婆さんには子供が無くて、新治で生まれた『ぎん』さんを武左に連れて貰つたという間柄もあって、また新治のお爺さんが武左の『清光丸』に乗つていたので、私を新治の嫁に、

という話になつたんだと思います。私は『まーだ年端としもいかない者を、やあやうい！』という気持ちでした。

思いもかけず新治に嫁に行くことになりましたが、後で思うと、何かやつぱり新治に来る縁があつたんじゃないかなと感じることがありました。この人（山田徳治さん）と一緒になるとか全然思いもしない時に、ある日、文衛の母かが、何故かは解りませんが、「あれ、諸神様やあううあ、この子らう助けて下さい、この子らう助けて下さい」と言つて、お光ひかり（燈明とうみょう）をあげて、お洗米せんまいをあげて、家の先祖様から仏様から神様から拝み廻つていきました。『あんで（何で）ああして、あの母かは、拝み歩つたーろーなあ？』と思つていましたが、新治の息子に召集令状が届いて、『武運長久ぶうんちようきゅう』というよりも、戦争で死なないように守つて下さいと願つていたようです。何かこういう風に（後に嫁に行く）なるように生まれて、決まつていたことなのかなあ？と思つたりもしました。

まだ結婚前のお父さんの方は、八月の何日だか、雨あめがしとしと降つていた時で『兵榮丸ひょうえい』に乗つて祇苗ただなえでカツオの餌おにぎりを獲つていて、白旗を立てた『文榮丸ぶんえい』がこつちに向かつて走つてきたそうです。直感的に『変だなあ？、あの船は変だなあー、あく俺おれを迎えてたじやあないろーかなあ？』といふ予感がしたそうです。

案の定、召集令状が來たとのことで、「何時いつだつづう？」と聞くと「船が待つてーるだー」とのこと



出兵時 東京にて親戚と

でした。何と！連れて行く船を待たせながらの招集だったそうです。急いで沖から戻つて、食う間も飲む間も無く行かなければなりませんでした。新治のお母さんは仕度もたくをして、『赤羽』になつていた西瓜を「あれー、食つてけやー、食つてけやー」と言つて、なま幾つの西瓜を割つて何度も差し出すのに「とおくとお、その西瓜を、ひとつ切れも噉まずに行つたあー・・・」と泣いて話していました。

お父さんは北支方面に行き、三年ほど戦地にいたそうです。次々と運ばれて来る怪我人の処置をする衛生兵でした。戦地で『腸チフス』が流行つた時も戦病者の手当を沢山しましたが、腸チフスには罹らなかつたそうです。

戦争はまだ続いていましたが、退役して神津に帰つて来てから、私は新治の嫁に入りました。戦地にいた時、軍医からも信頼されて、「レントゲン技師になつて、家に帰るのは止めろ」と言われたそうです

が、「長男に生まれて、家族の面倒をみなければならない立場なので」

と断わつて帰つて來たと言つていきました。その話を聞いて、「やーい、技師になつてーれば、オイとも一緒にならずに、オイや何処でか東京でーて、まーだ良い暮らしーしたかも知れないに」と言つて笑い合つたこともありました。

軍隊では『軍曹』にまでなりましたが、帰つて来てからは、兵隊時分の話はしたがりませんでした。嫌なことばかりだったのか、テレビの戦争物もあまり観ようとはしませんでした。



戦争から帰つてすぐは職もないでの、兵造の『兵栄丸』で、しばらく機関士をして働いていました。体も弱く、寝たり起きたりもあつたので、まだ村長をする前の『松屋』の松江春之助さんが「何處かの『陸人』になればいいじえー」と言つてくれて、役場に入りました。

最初は民生課で、昔の木造診療所の時代も担当課で、最後は『教育長』を務めさせてもらつて、村長の『松本一』さんと一緒に、『神津善行』さんと『中村メイコ』さんに会いに行き、『神津小学校贊歌』をお願いして作つてもらつたと言つていました。教育長は二期務めて六十二歳で引退しました。

新治に嫁に入つて、ほんの三日だか四日だか経つたばかりの時、新治のお婆さんから「炭を提げに行つてこーやあ」と言われました。天上山に八丈島から炭を焼きに来ている人が居て、その炭を、今は通行していませんが『長根』の『コチカラ堂』に上がる沢になつた所の、ちょうど平らになつた場所にけつこう大きな倉庫があつて、天上山から『大川』を渡つて、そこまで持ち降ろすのです。

まだ働きつけてもいなない体で『平八』の母と『佐吉』の『お花』母に付いて、三人で行きました。

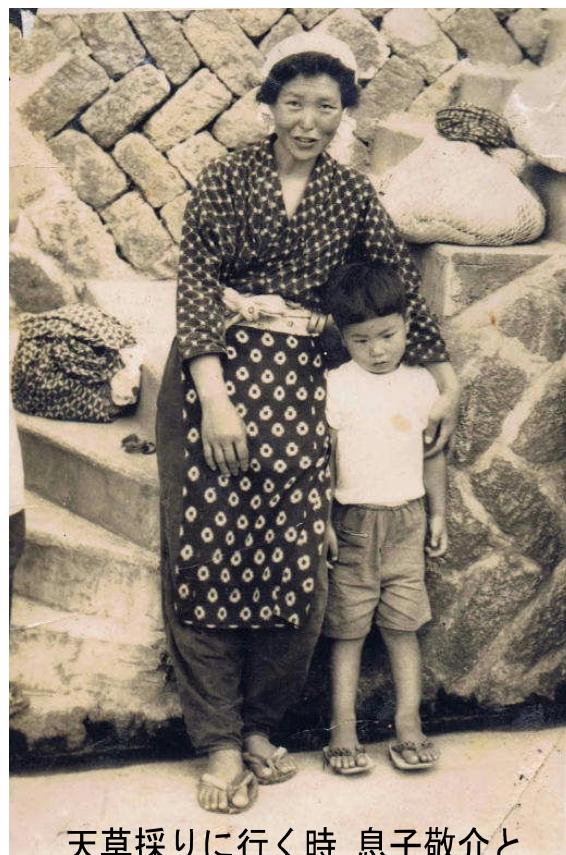
炭を焼いている婆さん達の釜へに行くには、天上山の『白島』を上がりあがつて行つて、『櫛が峰』を渡つて行きます。風の吹いた日なんかは凄く怖なくて、着くともう、てんきり「提いで行きなきーい」で、出来あがつている八貫俵(約三十kg)の重さのある俵を一人一俵提げて、一日に三俵しか持ち出せませんでした。

慣れない重労働で、私の足がブルブルーッと震えて炭俵を落つちよいかして、まごまごしていると、「あれえ、いなさあ、また落つちよーかいてーたかやあ」と言つて笑われました。『いなさ』と言われたのは、『いなさの風は怖ない』と云われていたみたいですが、昔、新治の先代に、いなさの風(南東から吹く風、特に台風の時期の強風)にも負けないぐらいの強い人がいたので、からかつてそう言われてい

ました。

徳治さんのお爺さんだった人は、私も知らない昔の『流れ（与種山の洪水）』で流されて亡くなつたそうです。お寺の墓碑に『山田新治郎』の名で刻まれています。

戦時中、私の方は神津に『国防婦人会』というのがあつて、たしか『竹源』の『大野はる』さんが初代の婦人会長をしていたと思います。それと区ごとに通知・連絡係りなどをする班長さんがいて、私は班長をしていました。白いかつぽう着に襷を掛けて、当時今



天草採りに行く時 息子敬介と

より広かつた『酒屋』の庭で『竹槍訓練』をしました。また『消防訓練』では空襲があつた時のために、報告を受ける役場の担当係の所に走つていつて、「只今、〇〇宅に焼夷弾しょういだんが落ちました!」と伝令して、「ハイ、わかりました!」と返事を受けて、また走つて戻つてくるという伝令の訓練もあって、今では考えられないような戦時に備えた活動をしていました。

戦争が終わつてからは今の『婦人会』になつて、料理の先生を呼んで、小学校で料理の講習会を開いたりして、会長も一時期務めさせてもらいました。

戦争も激しくなつて『新治』から疎開に出た時は、娘の『峰子』はまだ生まれて六ヶ月の赤ん坊でしたが、背中に背負つて船に乗り込みました。新次の者と『かえも』の人達も一緒でした。かえものお母さんは「どうせ、いいやあ、いいやあ」と、疎開に行くのは止すよような氣で云つていましたが、家族がみんな疎開に出て誰も居なくなれば、

やつぱり、お互い寂しくなるので「あいべー、おらに連つてあいべー」と言わせて行く気になつたみたいで。三区の人達と一緒にではなく、二区の私達と一緒に行きました。

疎開に出る船も敵機に見つからないように夜間の航行なので、まず大島に一泊して、次の晩に伊東に向かいました。そして伊東に着いて、手配されていた宿に着きましたが、一晩滞在する予定が、すぐ「警戒警報発令！』と警報があり『新井の山へ逃げろ！』とのことでした。役場の人達が向こうで待ち受けてくれていたみたいで。新井の山と云われても、他人の土地じやーあるし、夜のことでは誰も道が判るわけはありません。とにかく山の中に逃げ込むと、「はつ、防空壕があつたあ、いい塩梅だあ」という声がしてその中に入りました。すると伊東の人達も中に入つて来て「島の衆！、除からつしえー、除からつしえー」と云つて私達は追ん出されてしましました。もう何処へ、どつちに行つていいやらも判らず、途中で「やうい、此處へとしやが

んで寝てくばあ」と言つて、疎開の初日は、仕方なく山住まい（山の中へ過ごす）をして一晩過ごすことになつてしましました。明け方、警報が解除されて、やつと宿に戻ることができました。

この日の朝、疎開地に持つて行く荷物を船に積んだままにしてあつたので、『昼間、荷物を降ろしに行くばあ』ということになつて港の方に向かいました。すると伊東の市場にいる人から『天皇陛下の放送がある！』と云われて、正午から大勢人が集まつて市场的ラジオで、『玉音放送』を聞くことになりました。何の放送か知らされていなくて、みんな正座とかではなく、つ立つて聞いていました。

でも放送を聞いても何の事か？私達にはさっぱり解りません。伊東の人達が話しているのを聞いて、そこで初めて・・・「はあうううあ、戦争が終わつたつちやあ」と知ることができました。実際、その時の気持ちは嬉しいうれしい！って言つていいだかどうだか（笑）、なあうあ、正直、『嬉しい！』って言いたいような気分でした。

今日は西多摩へ行く、という時に、疎開に行く必要が無くなりました・・・。船に積んであつた荷物も、食糧（米と麦）から何から全部神津に帰つて来ました。また夫が当時は『清光丸』に乗つていて、軍の食糧とかも運搬していた関係なのか、『新次』には米がいくらかありました。そして疎開前に『武左』の『上ん山』中に全部、芋を植えたり、畑の空いた所には、かまくず里芋を植えたり、キビを蒔いたりしておいたので、食べ物に不自由することはありませんでした。

疎開先の食糧に、と持つていった麦は、親戚達や疎開から帰つて來た人達に、これから蒔いて作る麦の種用に持つていつてもらいました。実際に西多摩まで行つた他の区の人達で、疎開に出る前に『作付け（苗の植え付け等）』ができなかつた人は、疎開先で大変な思いをして、神津に帰つて来てからも食べる物がなくて辛い思いをしたと思します・・・。

それからずつと今まで新次で暮らしありました。私は姑（おたん）

さん）さんに恵まれた嫁で、本当に有難いと思つていきました。おとーなしい、やさーしい人で、嫁も自分の子（私にとつては小姑）も差別などは、しない人でした。そして昔はお寺に供養としてガンガラ（缶）に詰まつた菓子を持つて行つたり、やつぱり、いつの時代も『死に生き』があれば、七日（なのか）、七日（なのか）に本堂に上がって念佛をあげて、供養にもらつてきた菓子なんかを、我が子に三つやれば、私にも三つくれてとう感じで、私が「いいややあ（くれなくともいいよ）、母（かあ）、わづかな物まで、おいやいいや」と言うと、「人間はなあ、食べ物でーてな、根性を曲げるもんだしかし（心が曲がつていくものだから）」と言つて、それならそんなことの無いように、同じよーに我が子も人の子にも分け与えてくれた、そんなお婆さんでした。

新次に嫁に来たのは十九歳の六月で、当時の嫁入りでも早い方でした。子供は三人で男一人と女二人です。孫が七人、曾孫（ひまご）が八人？くらいいます。（笑）

今は週に三日、デイサービスに通っています。デイサービスは面白くて、遊んでばかりじゃなくて、あれーしてみたり、これーしてみたり、体が動いてさえいればよくて、仕事の無い方が困ってしまいます。みんなとのカラオケも楽しいです。

家の中でも手を動かしていた方が健康にも良いので、孫にあげる小物や、花を摘んで来て押し花を作つて、それに『もろみや』からクレヨンを買って色を付けて、お爺さんが使っていた額に入れて飾つたりして楽しんでいます。

おかげ様で八十八歳の『米寿』を迎えることができました。米寿記念の着物も孫達が買ってくれて、姪つ子や、東京からも孫子等まごこらが来て、四月の八日に家族親族集まってお祝いをしてくれました。ありがとうございます。

(以上書き書き)



思ひ出

大正十二年四月十二日生 八十九歳

前田 市之助（市平）

私は『市平』家、八人兄弟の長男に生まれました。学校へ行く時は、着物で素足に草鞋か草履や下駄をはいて、頭は坊主刈り、こんな格好で風呂敷包みを一つ持つて行くだけで、勉強と遊ぶ事ばかり考えていました。授業が終わって校庭に出ると遊び道具がいっぱい有つて、まずは砂の入った米俵をかつぎ廻つたり、鉄棒にぶら下がつたりして遊んでいました。

当時の子供は男の子も女の子も区別なく家の手伝いで働きました。学校から帰ると、縁側に今日やる事が書いてあり、焼山へ来おー」、ホツチ畠へ来

おー」。来なくて良い日はジャッコ（小さなイモ）をこしらえて（皮をむく）いれやー」と、又風呂の水をためとけやー」……と、こんな時代でした。

中でも一番大変だったのは子守でした。ある日「沖ん沢へ来おー」と書いてありました。家から沖ん沢だとけつこう歩きます。雨の降つた後などは大小の石ころの間をかわしながら相当の時間がかかりました。着いてみると、『あげ物』（頭上に荷物を載せる時のクッションに使う広く長い布）を広げて、その上に赤ん坊が寝かされている。母は一生懸命イモを勧^{うな}つていた。「待つてえーたーやー」とすぐ『はつと』（昔の長いおんぶ紐）でおぶられた。私は背が低くて、下の子供は皆普通だつたので、おぶると、その子の足が私のひざの裏まできて、寝込んでしまうと重くて動くことも出来なくなってしまいます。

子供が子供の子守をするのは長くは持ちません。すぐ泣きだす、ずれると背中であばれ出す、一時間も経たない内に我慢が出来ず、たまらず母の所へ行くと、「もおーちつと待つてえれやー」と言いながらア

メ玉をくれてだまされる。当時そのアメ玉は一銭で二個買えて、子供の口へは入らないような大きなアメ玉でした。しょぼしょぼしながら、しかたなく島の土手の方に行つて、背中を土手におつづけて休んだものでした。思い出しても、本当に大変でした。

他の友達は遊ぶ時間も遊びの仕方もいっぱい有つて、日曜になるとコンピ山、スカツ原山^{ぱら}、チャンバラ山、赤ツバラ山へと飛び廻る楽しさでした。私の家は農業も幅広くやつていて船も持っていたので家の手伝いが忙しくて、たまに「今日は行かれるしかし、チャンバラの仲間にしれよ」と仲間入りをたのむと「毎日来られるもんじやあんまいし、うなーだめだあ、あてになんない」と断られて仲間はずれにされたこともありました。

そんな時は他の兄弟仲間達と赤ツバラ山へと行つて『クビ』（小鳥の首をはさんで獲る仕掛け）をイモを餌にして作つて『赤ツバー』（鳥）を獲つて遊んでいました。烟に行く時も何か所も仕掛けているので、

行くたびに掛かつている赤ツバーを、『今日は何羽掛かつていた』、と羽と皮をむいて軒下にぶら下げ眺めながら、増えるのを楽しみにしていました。煮つけたり炙つたりして正月のごちそうにもなつたので（笑）、時代は変わつてしましましたが、子供の頃はそんな『悪いたずら』をして遊んでいました。

昔は本当に小鳥の多い島でした。

今は『はなつん』（目白）でさえも、椿の花が開いてきた時分に花の蜜を吸いに来るぐらいで、食



べ物が少なくなつたのか野良猫やカラスにやられているのか、畑に行つても山の中にも以前と比べて全然鳥の数が少なくなりました。

この頃は弟の昌一郎がいつも一緒でした。ある日、母からひまがらえた時のことでした。前浜サワラで『ホータバ(ベラの一種)』取りのえさにするために、カニを取つて遊んでいました。すると後ろの岩かげで凄い音が聞こえてきました。おぼけて(おどろいて)後ろを振り向いて見たら、大きな『ボテー(ササヨ・イスズミ)』が潮に取り残されたのでしよう、カニを取るのも忘れて追っかけ回し、やつとのことで捕まえました。その辺で竹を拾つて来てボテーに突つとーして、弟と意気揚々と家に向かいました。

歩き始めて間もない頃、急にあたりが暗くなつてきて、大粒の雨が降り出してきて体に当たると痛いくらいでした。ザーヴー降りの大雨になつてきて何故かうれしくて、ただただ先を急ぐことしか考えていませんでした。昔は『長沢』から『ハバタ』迄はボーフの木が生い茂つ

ていて相当の時間がかかりました。

しゃがみながら、ようやくハバタの河原まで来ると、河原は大小の石を転がしながら音をたてて流れています。それでも早く向うに渡りたいので、石の流れでこない間をねらつて渡ろうとしていたら、二人位のいかい声で「アブナイ!、ダメだ」と怒鳴る声がしました。驚いて振り向くと、女の人が雨の中を飛び出して来て私達二人を発電所の中へ連れ込んでくれました。そして「早く着物を脱げやー」と言つて弟と二人裸にされて「すぐに乾くじよー」と言つて大雨の通り過ぎるまで見守ってくれました。

その時の発電所の人は体のがつちりとした大柄の、名前は赤岩さんという人で、もう一人のお手伝いの人は『えいとう』のお母さんでした。しばらくして雨も止み体も暖まり、着物も乾いて「はい大丈夫だじよー」と笑顔で見送つてくれました。あの人達が忘れられない思い出になっています。

昔は河原をへだてて向うに行く橋は『松工橋』しかなくて、市平から仕事で向こうに行くのに、いつもは下流の橋の無いところを通つて近道で十四～十五分で浜へ行かれましたが、雨が多く降つたりすると、家に帰るには、ずっと上をまわつて松工橋を渡つて前の農協の所を上がつて帰るので、二十分～三十分はかかりました。

その頃『由エ門』のすす掃きの手間（手伝い）に呼ばれて何回か行くことがありました。水を運んだり、居士（昔の板張りの部屋）を拭ふいたり、色々持ち運ぶ手間をしました。由エ門の『おすわ』婆あは、市平の孫婆あさんです。仕事の切れ目で手を休めると、おすわ婆あがお茶を持って来てくれて、よく夫の鶴松爺い（松本鶴松村長）の水道敷設の時の苦労話を話してくれました。

水道の無かった昔は、『どかん川』と云つて土管をつないで滝川に流れる清水から神社の西側の貯水池に流し、さらに旧役場の西側の旧消防団詰所の貯水池に導水して、ここから女性達が毎日水桶で大変な思

いをして家まで水を運んでいた事や、その後神社の貯水池から鉄管を使って、河原を横切つて土管をつけ、寺の近くの貯水槽に水を引いて、そこに始めて蛇口が付けられた事、松本鶴松村長が時の軍部を動かして、下士官十数名が来島してきて水道工事が村民あげて行われて、大正十五年に簡易水道の基礎が作られた事等々、大変だった話をうなづきながら聞いていました。

昔はみんな徒歩で島の何処へでも行きました。神津で車が走



るのを見始めたのは、戦争前の私が小学校二年か三年生の頃でした。

その時分に一番先に『丸甚』が『オート三輪』を使って走り出しました、四輪の車ではカーブがきつくて曲がれなかつたみたいで。まだ道路の整備もされていなくて、車で橋を渡つて河原向こうを走れるようになつたのは、けつこうたつてからだつたと思います。とにかく道路は全然舗装されていなくて、雨が降るとグズグズの道になつて、坂道なんかで行つちやー戻り、行つちやー戻りしていました。幅も狭いので左右の木の枝や竹藪たけやぶが覆おおつて いるような状態でした。

当時、私達の時代までは自給自足の時代で、錢は無くても食べる物さえあれば生きていけるという時代でした。畠の物ものだあ、海の物ものだあ、イモだとか麦の多い飯だとか、神津に限らず伊豆近海の生活は皆同じでした。今は大変で年を取つたり、商売（漁）が無かつたりすると稼げなくて、一日も錢が無くては生きちやいかれない時代です。

昔と今と比べてどつちが良かつたということになると、何うんとなく

のんびりとした昔の方が良く過ごせた、と皆そう言います。

やがて学校（尋常高等小学校）も卒業し、大人の仲間入りができました。すると間もなく、当時の平七組の生宝丸のおやじが『合』へ入らないか」と言つて何回か家に來たようでした。その頃、市平にも機械船『市平丸』がありました。『長八ちょうは（橋本屋）』から買い求めた船でした。漁師にならなければいけなかつたのですが、実は私は船に弱く、機械のにおいが嫌いやで、家で船の話をされただけで気分が悪くなつてあげたくなる。そんなくらい船が嫌いでした。

しかし、そんな私も間もなく平七組で働くことになりました。十六か十七歳の頃でした。昭和十三年には昼間の『ハイトイビ』漁に連れられ、十四年には『春トイビ』の夜の漁に、そして十四年の五月には『マンガー』の乗組員で働きました。これが私のマンガー漁の始めでした。思い出して昔の手帳を取り出して見てみると（一回 三円五十錢、二回 十六円、三回 二十五円、四回 十四円）と、九回合計で百九十

九円六十銭と書いてあります。昭和十四年頃はこんな稼ぎでした。

又、十四年の十一月には、十二名の乗組員の一人として秋刀魚漁で大島へ行きました。波浮港に着くと、神津から持つて来た米俵（十六貫）を「ほらよ！」と二人で担がされました。一貫は今の大島へ行きました。波浮港に着くと、神津から持つて来た米俵（十六貫）で十六貫で六十kgにもなります。私達の宿になつて『上山』の製材屋の爺さんの家まで今でもどうやつて担いで上がつたのか、首をかしげながら思い出しています・・・初めての秋刀魚漁で忘れたくない思い出になりました。

やがて二十歳になり、新島で兵隊検査がありました。神津島からも二十名余りが検査を受けに行つたと思います。その中でも『甲種』に合格出来たのは八名程でした。その仲間の一人に入れたのです。体重、身長ともやつとでした。「甲種合格！」と呼ばれ、背中を引つ叩かれて、嬉しくて跳び上がりつた事をおぼえています。四月十日の入営で、同級生で『源六』の鈴木芳太郎氏と二人、東京湾の要塞になつて

いて重砲がある横須賀まで行き、重砲兵として入隊しました。でも同じ兵科でも顔を合わすこともありませんでした。

終戦までここで勤めていましたが、戦争が終わり敗戦になると同時に、国内の中隊が全部、千葉県の館山たてやまにある女学校に集結し、そこで軍隊の『解散式』が開かれて、私も参加しました。

程なくして私も無事神津に帰島することが出来ました。でも食糧難の最中で、除隊して帰る途上から『これからどうして生きていこうか、どうやって生活していこうか』と思いあぐねていました。帰つてきても案の定、食べる物も着る物も何も無く、一からの出発でした。先ず、山イモさが探し・フジの根掘り・里芋の葉・エビスの葉・クワの芽とり等々、食べられる物は何でも採つて来て、煮たり炒めたりして食べて生きのびました。そんな中で一年か一年半くらいかかるて、イモの株を集めて作れるようになり、イモを食べて何とか食い継いで生きられるようになりました。

畑仕事に行くのにも、配給の『オートミール』もありましたが、家族が多いので薄めて薄めてお粥になつたようなものを飯ごうに入れてお昼の弁当にするのですが、畑仕事で昼まで腹がへつてもたず、少し吸つて、少し吸つてしまいながら腹に入れても、お粥のようなものなので、すぐ腹がへつてしまい昼前にはなくなつてしましました。帰りも薪を持って行きたいのですが、体力自体が弱っていて、『背負子』を背負つて歩くのが本当に大変でした。戦争の影響で、やつと戦争が終わっても、まだまだ厳しい時代が続いていました。

そして今度は金を稼ぐために手分けして『絹さやえんどう』を作り始めたのが昭和二十八年頃でした。『半二』の昔役場で収入役をやっていたおじいさんが絹さや作りの経験が有ることを聞いて、作り方を聞こうと思つて手帳を持って家まで行き、教えてもらつて作り始めたのは私達は島で最初でした。それからずっと努力を積み重ねて、昭和の四十五年に収穫して稼いだ額が三百万弱になりました。す

るとその話が広まつて、『神津で農業をやつてこれだけ稼がれるだいば、工事に歩つちやーいらんない、天草も歩つちやーいらんない』とかいう騒ぎになつて評判になり、絹さやの商売が村中で盛り上がり、絹さやの商売が村中で盛り上がつてしましました。そして二十人以上の人人が新たに作りはじめました。

でも、絹さやは神津より先に伊豆方面一帯でも作つていて、とにかく骨の折れる仕事でした。消毒も大変で、三月～四月頃が忙しくて、収穫した絹さやの選別に朝方まで



かかる事も少なくありませんでした。大変な事がたくさんありました
が、時代の波で、だんだん作る人もいなくなってしまいました。絹さ
やは平成元年まで作りました。そして何か良い商売はないかなあ、と
考えていたところに『レザーファン』が八丈島から神津に広まつてき
て、平成二年からはレザーの栽培に切替えました。

海の方では父が船で『マンガー（ひらくさ）』漁をやっていたので、
昭和二十六・七年頃、父と自分で船を二隻にしてマンガーを始めま
した。海はマンガー、陸おかは絹さや、その後はレザーファン、と、多い
時は大家族で十四人もいて、家族分かれて働きました。神津もようや
く春を迎えたかの様に農業も海の漁業も稼げるようになりました。又
その内に観光も始まり、船を二隻求めたこともあって私はマンガーを
やるしかありませんでした。元々船に弱かつたため食事もとれず、食
べれるのは毎日昼を過ぎてからでした。

『マンガー漁』というのは、昔は四月十五日の『長浜まつり』の翌日

が口開け日でし
たが、皆忙しい
ので十七日頃か
ら始めて十月い
っぱい頃まで揚
げていきました。

十五m～二十五

mくらいの海底
に生えている平
草を、『マンガー

（万鍬）』という
引っかける漁具

を沈めて、船を
横にして流れされ



マンガ漁具

ながら、平草を引っかけて採る漁で、沈めて、道具を使つて揚げて、草をはずして、また沈める作業を繰り返します。ただやみ雲に沈めるのではなく、場所を確かめるための見方があつて、沈めた時の自分の頭と山の距離の具合と、流して行つた先の頭と山の距離の変わり具合を検討して揚げるのですが、そうは言つても十人十色でなかなか難しく、技術のいる商売で大変でした。

私達が若い『兄いら』になつた時分で、農業の手間に畑に連れ歩つた頃には、海藻も干して畑の肥料にしたもんでした。船で肥料の海藻を採りに長浜から名組の方へ行くと、海が何十mと全面海藻で覆われていて、そこに船の先っぽをおつ付けて海藻をかき入れて家に運び畑の肥こえにしました。そんな時代でした。

当時から『天草』漁もありました。平草よりもずっと浅瀬に生えていて潜つて採ります。年に二～三回口開けをして男も女も稼いだ時代で、女人人は神津で暮らしたくとも『天草を潜れーない者は嫁には行きれないだつちやー』と云われたぐらい神津島と三宅島の天草は有名でした。

今、口開けの時期になつて潜りに行つても、磯に無くなつてしまつたと言つて、一日に昔の何分の一どころか何十分の一しか稼げません。天草も採つて採つて少なくなつたと云うよりも、一口に言うと何か汚染されて「海 자체が汚れた」ということも言えると思います。

そんな中、昭和三十七年に平草組合の大役を命ぜられ、何かと大変な年になりました。昭和三十七年頃のマンガード船は合計で七十四隻もありました。他の商売をしていた人達もマンガードをし始めて、親父等がマンガードをして家族は人夫で働いてという感じで、神津の漁をする人達のほとんどが関わつていていた状態でした。

朝、出漁する前、前浜に出揃つた様子、恩馳おんばせへ向かつていっせいに走り出すその様は、たとえ様のない素晴らしい眺めでした。当時の恩馳の周辺は面おもても裏も平草がとにかく凄くて、皆が想像出来ない位の稼ぎ

ができました。



昭和36年3月 市平丸進水式

そして沖から帰つて浜へ降ろしたヒラクサの干場は、長浜、沢尻、砂原、前浜、多幸と、それでも足りない有り様で、今度は干しあがつて保管する倉庫の方も充分ではなくて、個人の所へ持ち込んだり、風ぎ続きになつて量が増えるとケンカまなくりの様な毎日でした。この時代はトビ船が多く、イカ船、引繩船、釣船等々で海はまるでごつた返しのような状態でした。こんな昭和の良き時代もありました・・・。

しかし、こんな家族ぐるみで稼げた時代もそんなに長くは続きませんでした、盛況の中でも次第に大変な時代になつて来ました。それは平草の替わりに食品として出回ってきた、北海道や各地の内海うちうみで水揚げされた『オゴ』という海藻でした。戦後の食糧難の時からありましたが、その海藻が大量に日本全国に出回るようになり、刺身のツマだけではなく、食糧不足のため、うどんやそうめんにまで使われたと聞いています。おかげで平草の相場は安値が四～五年続いてしまい、がんばつても高値になることはなく、泣きの涙で神津島の『マンガーフ漁』は終つていきました。

今考えると、あだつかいの（大量の）マンガーフが神津を賑にぎわして活気付けていたのに、北海道のオゴがなければ、今でもあの盛況が続いたら、神津島は本当に金持ちの村になつていただろうに・・・と思うとすごく情けなく、懐かしい思い出で忘れることができません。こんなことも神津の漁の歴史です。

長い漁師生活で『市平丸』も初代から四～五隻船を取り替えてやつてきました。色々な漁の商売が移り変わつていきましたが、昔、神津島を活気付けて、皆を稼がせてくれた、あの恩馳の海底は、「今、どうなつてーるかなあー・・・」と思い出しています。

（以上本人原稿及び聞き書き）



あ　と　が　き

「お年寄り作文集」の第十九集ができ上りましたので、皆様のお手元にお届けいたします。

今回掲載した山田ゆき子さん宅に聞き取りに訪問した折、昔の子供達の遊びを聞くことができました。今の子供達には知らない遊びですが、自然の貝とか身近な物で、知恵を使って自分達で編み出した遊びです。同じ遊びでも年代で變つていったみたいで『けつとばかし』も冊子の『神津島の子供の四季』ではサザエの蓋ふたを使い、ゆき子さん達はボールでした。遊びの中でも皆で考えたり、工夫したりすることで、昔の子供達は知恵を育んだり社会性を身に付けていったんだと思います。

今回、原稿作成、書き書きにご協力下さった方々に、厚く御礼申し上げます。

平成二十五年三月

神津島村社会福祉協議会

お年寄り作文集 第19集
発行 平成25年3月
神津島村社会福祉協議会
TEL 04992-8-0819